

〈共働の宗教指導者〉に関する一考察 ——キリスト教と仏教を中心に——

川又 俊則

A study on the Religious co-leader ——Christianity and Buddhism——

Toshinori KAWAMATA

はじめに

筆者は社会学の立場から、日本のキリスト教や仏教を対象に、それらの地域社会における受容・定着、そして変容の問題を研究してきた⁽¹⁾。調査した地域で、多くの信者や牧師・神父、住職の方々に出会い、様々なことを学ばせていただきながら、現在まで調査研究を積み重ねてきている。社会科学の調査研究において、比較の視点はたいへん重要であり、とくに「差異」の考察は研究の要諦である。だが、逆に「共通」部分も無視してはいけないうらう。本稿で扱うような問題に焦点を当てる場合、教派・宗派、時代・社会、集団規模など「差異」ばかりを見てしまいがちである。だが、それを超えた「共通」点に注目することで問題が浮かび上がってくることもある。本稿は、筆者のこれまでの調査で得た資料や他の多種多様な文献資料の検討により、「共通」する部分を掬い取っていきたい。

1. 問題の所在

新宗教において「共働の教祖」という概念がある。「異質のリーダーシップが併立し、両者の共働や相互作用を通して教団の発展がもたらされる」ような、教祖と「教祖を補佐する役割を果たしたリーダー」のコンビのことである⁽²⁾。大本の出口なおと出口王仁三郎、孝道教団の岡野正道と岡野貴美子、立正佼成会の庭野日敬と長沼妙佼、霊友会の久保角太郎と小谷喜美など、新宗教教団において例に枚挙の暇がない。「共働」の字義は「共に働く」ことであり、教祖とその補佐役として共に宗教集団のために働く指導者たちのことである。個々の歴史を検討すると、「共働の教祖」であるがゆえに大いに発展した教団も少なくない。

このような二元的リーダーシップは、新宗教教団だけにあるのだろうか。否。古くは記紀の時代の伊弉冉尊（イザナギノミコト）・伊弉諾尊（イザナミノミコト）、また、その後の卑弥呼の時代などに遡っての説明も可能であろう。また、日本のシャーマニズムにおける一つのモチーフとして、女性シャーマンの巫女と男性司祭者の審神者（サニワ）の存在は広く知られており、多くの研究者がそれに言及した論考を發表している⁽³⁾。そして、現代日本においても、日本仏教やキリスト教などで似たような構図を見ることはできる。例えば筆者は、〈牧師夫人〉へのライフヒストリー・インタビューによる調査を続けているが⁽⁴⁾、日本のプロテスタント諸教派における小規模教会では、（男性）牧師とその配偶者による働きで教会運営をなしてきたところが少なくない。また、仏教各派においては、在家仏教として従来から制度上認められてきた浄土真宗以外でも、明治5年の太政官布告、いわゆる「肉食妻帯勝手令」以後、「寺族」「寺庭婦人」と呼ばれる〈住職夫人〉の存在が公認され、以後現在に至るまで、彼女たちは寺務および檀務を通じてそれぞれの寺院および住職を支えてきた。

本稿で筆者は、現代日本のキリスト教や仏教における〈牧師夫人〉や〈住職夫人〉の役割・立場を確認し、個別事例を背景に、役割葛藤などの共通点を指摘する。その結果、現代の教会や寺院における〈共働の宗教指導者〉概念を提出したい。本稿の議論は、印象論としてすでに周知の事実かもしれない。だが、本稿では、自らの調査や様々な文献資料を用いることで、建設的な議論の基礎作業を行うことにする。キリスト教にも仏教にも多くの教派・宗派が存在し、それぞれが独自の活動を展開している。それらをすべて一括りにして論ずるのは無謀である。本稿では筆者の調査経験に裏打ちされたものに過ぎないが、それをもとに、前述のようなささやかな提案を行う。

役割葛藤（role conflict）とは、社会学における重要なキーワード「役割（role）」に付随する概念である。「役割」はある地位に対応した行動をすることを指す。役割演技・役割期待・役割取得・役割遂行などの関連用語がある。本稿では役割葛藤を「複数で多様な役割期待に応えきれずに発生する内面的なストレス」と定義して議論を進めたい。

2. 「宗教とジェンダー」に関する若干の整理

(1) 先行研究群

本稿は「宗教指導者の配偶者」が対象であり、先に挙げた〈牧師夫人〉や〈住職夫人〉を具体例として考察する。したがって、女性聖職者たる女性司祭や女性僧侶（尼僧）は考察の範囲外となる⁽⁵⁾。筆者は「共働の教祖」の議論を〈共働の宗教指導者〉の検討へと拡張したい。そこで、まず全体と比して圧倒的に多い（男性の）牧師・住職と配偶者

たる〈牧師夫人〉・〈住職夫人〉の問題を扱うことにしたい。性別が逆の組み合わせも想定しうるが、現実には少なく、筆者自身まだ調査できていないという資料的制約もあって、それは対象外とする。本稿では、男性の指導者たる牧師や住職に対して、その配偶者の立場・役割を確認し、とくに彼女たちの役割葛藤を検討する。もちろん、宗教とジェンダーの問題を扱う場合に、女性聖職者の存在の重要性は承知している。以下、先行研究者たちが提出している論考を概観しつつ、筆者なりにこのテーマを簡単に整理しておきたい⁽⁶⁾。

まず、宗教とジェンダーの問題として、先行研究者たちはまず、フェミニズムという観点で論究してきた。とくに、米国で1960年代後半以降に展開したフェミニスト神学は、フェミニスト神学事典や入門書も刊行され、その後、初期メンバーの研究に関する回顧もなされ⁽⁷⁾、キリスト教内部に止まる改革派とキリスト教を否定する革命派の相違のみならず、さまざまな立場・状況による差異に関する注目も集められている⁽⁸⁾。フェミニスト神学とは何か、誤解を恐れずに平易に述べるならば、1960年代の米国であらゆる価値観が問い直された運動の一つとしておきた女性解放という時代的潮流および「解放の神学」という学問的背景のなかで、キリスト教における男性中心主義に対する批判としておこった神学と言えよう。その代表的な研究者として、メアリ・ディリ、ローズマリー・R・リューサー、エリザベス・S・フィオレンツァ、エリザベート・モルトマン＝ヴェンデルらが挙げられる⁽⁹⁾。また、性差別だけを他と切り離して研究しているのではなく、多様な視点を持っていることも指摘しておきたい⁽¹⁰⁾。この学問史的展開に関しては、すでに多くの論者が整理しているので詳細はそれに譲る⁽¹¹⁾。フェミニストの視点は今なお重要である。

(2) 日本における「宗教とジェンダー」研究

これまでの日本において「宗教とジェンダー」研究はどのような対象をどのような分析枠組みで追究されてきたのだろうか。すでに10年以上前にヘレン・ハーディカが、その時点までの研究業績について、仏教思想・ケガレ概念・文献研究・シャーマン・役割・教祖などの多様な領域に分類している⁽¹²⁾。その後の研究を鳥瞰すると、主な対象として、ハーディカの指摘したテーマでさらなる業績が積まれた一方、日本仏教の各宗派の歴史的・現代的問題、新宗教教団の組織や教えの言説、信者たちの分析、さらにキリスト教教派の社会的状況などが扱われてきたと言えよう⁽¹³⁾。また分析枠組みについて、猪瀬優理は「ディスコース分析」的アプローチ、「教団組織論」的アプローチ、宗教のモデル提示機能に注目したアプローチなどと整理した⁽¹⁴⁾。いずれにしても、宗教が男女の間に

与えた権力や役割が不均衡・不平等であることについて、個別に追究したものと言えよう。さらに、日比野由利は研究者グループの比較検討も行っており⁽¹⁵⁾、すでにこの領域での研究は、活発になされていると言える。本稿ではそのすべてを再検討する余裕はない。以下〈牧師夫人〉と〈住職夫人〉に関する研究で必要あるものだけを言及する。

(3) 〈牧師夫人〉と〈住職夫人〉

宗教指導者の配偶者の呼称は様々ある。本稿に沿った整理も必要だろう。

まず、「牧師の配偶者」と言われると直ちに「牧師夫人」と想起するほど、キリスト教会において性別役割が浸透している現況を鑑み、その問題提起の意味も込めて、筆者は、この研究において、〈牧師夫人〉と括弧書きで用いている。日本ではキリスト教人口が他の欧米と比較して圧倒的に少ないこともあり、〈牧師夫人〉をテーマにした研究は決して多くはない。だが、〈牧師夫人〉自らのエッセイやウェブサイトなどの記述を見ても、その様子は理解できる。筆者自身は調査研究をしばらく続けているので、次節でその結果を簡単にまとめておこう。

日本仏教では、寺院に住む僧侶ではない者を「寺族」と呼ぶ⁽¹⁶⁾。宗派によって示す範囲が厳密には異なるが、概ね、僧侶の配偶者・子供・孫・親のみならず、弟子なども含まれる。僧侶の妻は浄土宗や日蓮宗などでは「寺庭婦人」と呼び、浄土真宗では「坊守」と呼称される。宗派によって語彙が異なること自体たいへん興味深い事実だが、その問題の追究は後稿にし、本稿ではこれらの語彙を丁寧に使い分けるのではなく、〈牧師夫人〉に対応する形で〈住職夫人〉と呼んでおきたい。その二つの総称として宗教指導者の配偶者とする。

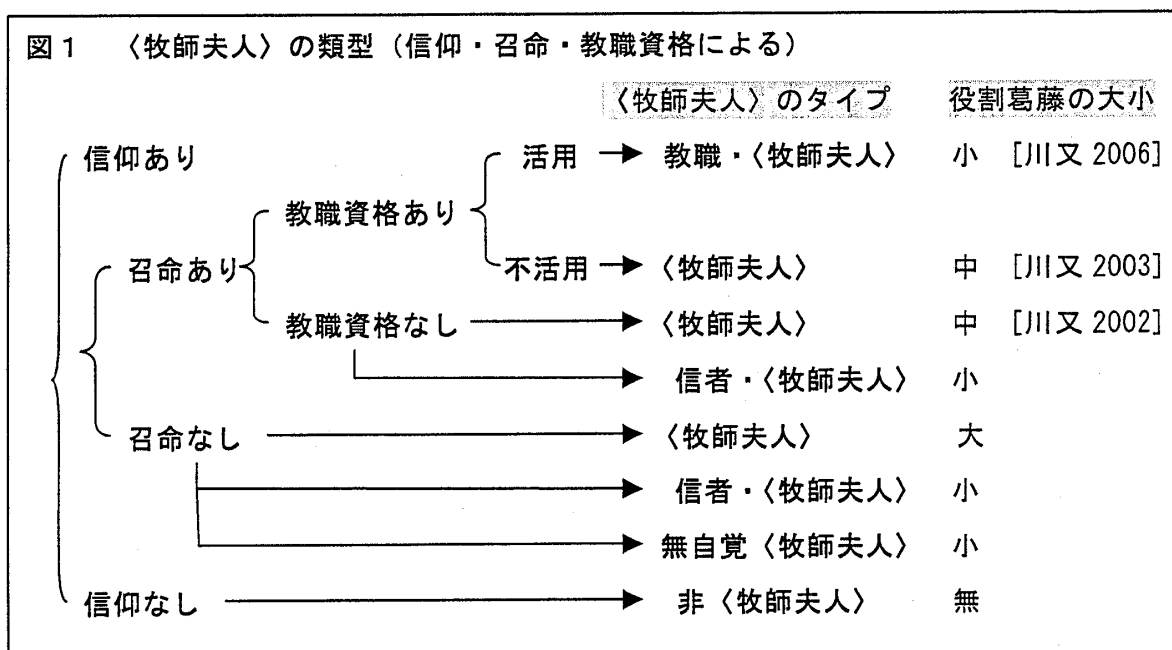
3. 〈牧師夫人〉の役割葛藤

筆者がライフヒストリー・インタビューを行ってきた〈牧師夫人〉たちは、それぞれの教会内でさまざまな仕事を抱えている。牧師の妻として、子の母として、さらには教会の一員としてや自らの教会外の仕事をこなし、個人的な興味関心にもとづく活動も行っている。教派・年代・教会規模・家族構成・ライフコース上の位置など個々に状況は異なる。だが、いずれにせよ、多かれ少なかれ何らかの役割葛藤を持ち、それを乗り越えるべく行動してきた人たちが多かった。以下でそれを整理してみたい。

(1) 〈牧師夫人〉の類型

そもそも、〈牧師夫人〉への役割期待とはどのようなものだろうか。牧師・信者・自分

自身とそれぞれ異なる役割期待が見られる。一事例を紹介しておこう。「牧師の妻はいつも最高の学識が要求されながら、お手伝い、用務員、留守番、掃除婦から事務員になることまで要求されています」。「教会のガラスが曇っても、椅子が汚れていても、庭に草がはえても、牧師の妻は何をしているのかと言われ、また役員会にお茶を出さなければ機転がきかないと言われます」⁽¹⁷⁾。少し古い事例かもしれないが、決して極端なものではないことは、他の資料からも説明できる。そして、牧師からも信者からも様々な期待が彼女たちに向けられ、〈牧師夫人〉たちがそれに懸命に応えてきたことは、筆者の調査からも他の文献資料からも読み取れる。



〈牧師夫人〉たちを「信仰・召命・教職資格の有無」で類型化したものが図1である。
 〈牧師夫人〉の職務が神に召されて与えられた自らの使命、すなわち「召命」だと自覚して実践しているかどうかという点は、葛藤の大小に関わるというのが現時点での筆者の考えである。また、筆者自身はまだ出会ったことはないが、キリスト教信仰を持たずに牧師と結婚し、「牧師の妻」ではあっても〈牧師夫人〉にはならない人もいる。これも図1には組み込んでいる。

筆者がライフヒストリーを用いて示した考察で扱ってきたのは、図1の通り、「召命」経験ある〈牧師夫人〉たちが中心だった。だが、「召命」経験のない方々も調査している。そして、そのような〈牧師夫人〉たちは、(教派による位置づけによる差異もあるが)一人の信者としてだけでなく、「召命」という意識がないのに〈牧師夫人〉としての振る舞いが教会員から期待され、それに応えようとすると大きな葛藤に苦しむ。また、自ら

は信者の一人にすぎないとの立場を守り続けられれば、そのような葛藤は小さい。さらに、〈牧師夫人〉との自覚がない場合も葛藤はより少ないだろう。図1はあくまでも単純化した図式であって、〈牧師夫人〉個々の状況に応じて変動する。今後さらに調査を続け、これまでの知見を確認する一方、修正すべきことなども含めて検討を進めたい。

(2) 〈牧師夫人〉たちの現代的課題

筆者は事例研究を進めるなかで、〈牧師夫人〉たちの現代的課題として、①プライバシー、②家計、③育児・信仰継承、④老後、⑤役割葛藤という5つを抽出した。この課題は各々のライフステージの時期に負うところも大きく、例えば、③と④が同時に表出することはまずない。また、①で牧師館と教会が別敷地にある場合や、②で多数の教会員を抱える教会の場合は該当しないかもしれない⁽¹⁸⁾。だが、教会員数の平均が30名を下回る日本のプロテスタント教会では、教会の経済は教会員の献金に支えられていることを想起すれば、教会会計や牧師家庭の家計の潤沢と言い難い現況がすぐに理解できるだろう⁽¹⁹⁾。すなわち、①と②は現在なお〈牧師夫人〉たちの課題として残っているのである。

筆者の出会った〈牧師夫人〉の多くは、常に⑤の課題を抱えていた。彼女たちには、結婚・出産・育児期などのそれぞれの時期で、宗教的な問題や世俗的な問題などが現前する。その時期はちょうど、配偶者が副牧師から牧師へ昇格したり、新たに教会に赴任したりするなどの時期と重なる例も多く見られた。結婚し、牧師の妻となった彼女たちはやがて子どもを授かる者もいる。その場合は初めて母となったばかりではなく、〈牧師夫人〉としてもまだ不慣れな時期であろう。そのため、長きに亘って教会のリーダー経験を積むことで、様々な葛藤を克服する技量を得ていったと回顧する者もいるが、そうならず教会を離れた例もある。筆者の調査では、葛藤を客観的に見直すことのできる状況にあった〈牧師夫人〉たちが比較的多かった。筆者はこの〈牧師夫人〉へのライフヒストリー・インタビュー調査において、拒否された経験もあるが、その拒否理由として「まだ（経験を）話せる気持ちになれない」と述べられたこともある。調査拒否自体は、調査者としての力量不足の点もあろうが、今後も調査を続け、今まで得た事例以外の様々な事例を重ね合わせつつ考察を深めたい。

4. 〈住職夫人〉の役割葛藤

筆者は〈牧師夫人〉に比べ、〈住職夫人〉へのインタビューはごくわずかに止まっている。だが、住職の妻帯の問題を巡る理論的考察や、〈住職夫人〉や寺族たちの実態報告な

ど数多く目にすることができる⁽²⁰⁾。そこで、本節では自らのわずかな事例を提示するのではなく、それらの先行研究・調査の一部を取り上げて議論していこう。

(1) 〈住職夫人〉の宗派ごとの位置づけ

石上和敬は、浄土真宗本願寺派・浄土宗・曹洞宗の三派の宗派内での〈住職夫人〉の位置づけについて、各々の宗制を検討した⁽²¹⁾。前二者の〈住職夫人〉は、宗派内で義務的な研修などない緩やかな立場にある一方、得度をして僧侶になることも比較的容易である。後者は独自の資格が整備され⁽²²⁾、「寺族代表」になると寺院の代表役員の代務者になることも可能だが、得度して僧侶になるのは困難であると説明された。これら各宗派ごとの法規で見られる〈住職夫人〉の役割として次の語句が挙げられている。「住職を補佐」(浄土・真宗・曹洞)、「教化」(真宗)、「寺門の興隆」(浄土・曹洞)、「子弟(後継者)の教養(育成)」(浄土・曹洞)、「檀信徒の範」(浄土)、「檀信徒の教化」(曹洞)。集約すると、住職の補佐・檀信徒の教化・後継者育成である。その役割の軽重は法規上には述べられていないが、後継者育成、すなわち住職の跡継ぎ(子ども)を僧侶として育てることへの期待は後述するように最も重視されているだろう⁽²³⁾。

図2 仏教各宗派の〈住職夫人〉の特徴

	呼称	参加組織	教職資格等
天台宗	寺族、寺庭婦人	寺庭婦人会	寺庭婦人得度
高野山真言宗	寺族、寺族婦人	寺族夫人会	
真言宗豊山派	寺族	仏教婦人会	
真言宗智山派	寺庭婦人	寺庭夫人会	
浄土真宗本願寺派	坊守、寺庭婦人	仏教婦人会	僧職取得容易
真宗大谷派	坊守	坊守会	
浄土宗	寺族、寺庭婦人	寺庭婦人会	僧職取得容易
臨済宗妙心寺派	寺庭婦人	寺庭婦人会	寺族得度
曹洞宗	寺族	寺族会	寺族得度、僧職取得困難
日蓮宗	寺族、寺庭婦人	寺庭婦人会	

この三派以外の他宗派も確認しておきたい。そこで、信者数が上位を占める伝統的な宗派として、天台宗・高野山真言宗・真言宗智山派・真言宗豊山派・真宗大谷派・臨済

宗妙心寺派・日蓮宗について図2にまとめた。これらは石上が前述の研究で参照した『月刊住職』誌で扱われていた宗派でもある⁽²⁴⁾。本稿は、それを基礎としている。

この図2を見ると、〈住職夫人〉は寺族もしくは寺庭婦人、坊守との呼称が規定されていること、各宗派ごとに名称は異なるが、彼女たちおよび他の寺族・檀家などを包括するような組織を設置していることが分かる。さらに、寺族得度や寺庭婦人得度など、僧侶とは別の資格を設定する宗派も見られることが理解されよう。ただしこの資格は僧侶と同等のものではない。住職の配偶者が寺族ではなく僧侶を目指す場合と、牧師の配偶者が牧師を目指す場合を比べると、現在の各宗派の制度を見る限りにおいて、前者の方が困難だと言えよう。ある寺院の代表役員（主管者）となる僧侶であるが、女性僧侶（尼僧）のうち住職である割合は男性に比べてかなり低い⁽²⁵⁾。

(2) 〈住職夫人〉の役割葛藤

日本の仏教とキリスト教と比較した場合、重大な差異として仏教の世襲制を挙げられる。キリスト教会の牧師の赴任は任命制か招聘制かとなるが、いずれにせよ開拓教会などでない限り、ある教会で次の牧師が前牧師の子どもという例は多くない。数年から十数年程度で牧師は交替する。逆に考えれば、ある教会で役割葛藤に苦しんだ〈牧師夫人〉が、次の教会で全く別の人間関係のもとで新しい生活を送り、その葛藤が解消されることも十分可能である⁽²⁶⁾。一方、「世襲」が前提の〈住職夫人〉の場合、寺院を変えることは困難である⁽²⁷⁾。仏教寺院の住職や関係者、檀家たちは自らの関係者の墓地を持つ所属寺院の継続を願う。そのほとんどは、現住職の血縁関係者が次期住職として後継となることを望む。日本社会全体で、晩婚化・少子高齢化・都市への人口集中など変化しているなかで、仏教寺院だけがそれらを免れることはない⁽²⁸⁾。だが、「世襲」が困難であることの問題を、仏教寺院では、住職よりも〈住職夫人〉たちの問題として抱え込む場合が見られる⁽²⁹⁾。

「世襲」以外に〈住職夫人〉たちは、自らの役割をどのように捉え、葛藤を抱えているのだろうか。

まず幾つもの実態報告などを読むと、プライバシーの欠如や経済的不安定、他からの特別な目などを不満と感じ、檀信徒から信仰生活実践への質問以外に法要準備や毎日のお供えなどごく基本的質問などが寄せられるなどの現況、後継者の問題その他様々な問題があり、自らの役割を果たしている状況が見て取れる⁽³⁰⁾。

山内祥信は、質問紙調査資料をもとに、〈住職夫人〉としての役割から生ずる拘束感からプライバシー感情（筆者の述べる役割葛藤）が発生するとし、その発生理由を考察した

(31)。そして、法人収入が安定している専業寺院で〈住職夫人〉は、寺院運営の重要な役割を担うが、あくまでも「住職の補佐」のみであるため拘束感を強く持ち、逆に法人収入が少ない寺院では、住職が兼務するため〈住職夫人〉が一人で寺院運営を行って責任感を持ち主体的に活動しているため、拘束感が前者に比べて比較的少ないと結論づけた。〈住職夫人〉に対しては、住職からは「檀信徒への対応」「子弟教育」、檀信徒からは「仏事の相談」「寺の維持管理」を期待されていた。〈住職夫人〉自身は、「檀信徒の布教・教化」を目指す者が住職の期待よりはるかに多かった。彼女たちが主体的に寺院運営に携わることを望む傍証と言えよう。

実態報告やこれらの研究から、筆者は自らの〈牧師夫人〉調査と比較して、〈住職夫人〉も①プライバシー、②家計、③育児・信仰継承、④老後、⑤役割葛藤などでは同様の問題を抱えていると考えている⁽³²⁾。

5. 二元的リーダーシップと〈共働の宗教指導者〉

日曜礼拝において、司式および説教を牧師が行い、受付や新来者の応対を〈牧師夫人〉が担当している教会があった。入盆において各檀家を廻って棚経をあげるのは住職だが、檀家から戸別訪問や電話で簡単な相談を受けるのは〈住職夫人〉という寺院もある。つまり、現代日本の教会や寺院において（すべてが当てはまる訳ではないが）、自らの役割として少なくとも宗教的意義を自覚している〈牧師夫人〉や〈住職夫人〉が数多くおり、彼女たちの言動を観察する限り、それは単なる宗教指導者の配偶者というより、むしろ〈共働の宗教指導者〉と見なせるのではないだろうか。すでに前節までの検討において、〈牧師夫人〉や〈住職夫人〉（の多く）は、牧師や住職の補佐であろうが主体的であろうが、教会や寺院の管理運営という実際の場面で、〈共働の宗教指導者〉と呼ぶに相応しい役割が与えられ、かつ彼女たち自身がその期待に応えようとしていることが確認されただろう。

最後に、本稿で提唱する〈共働の宗教指導者〉概念を理論的に整理するために、二元的リーダーシップに関して若干考察しておく。ただし、リーダーシップに関する理論全体に言及する余裕はないので、従来より指摘されてきたごく基礎的な理論に関して幾つか検討するに止める。

まずリーダーシップの古典的研究として、個人の資質や社会的特性が注目された。続いて、機能の問題として民主的・専制的の比較がなされ、また、オハイオ州立大学やミシガン大学では、課題志向と人間関係志向という2つの志向に注目した研究が進められた。ここでリーダーシップは行動理論としてとらえられたのである。また、多くの実験

と調査の後、三隅二不二はPM理論を提出した⁽³³⁾。このPM理論とは、集団は課題遂行 (Performance) と集団自体の維持 (Maintenance) で動くという仮説にもとづき、それぞれの機能の強弱で4タイプにリーダーシップを分類するアイデアであった。この2つを平均以上に持つPM型と一方だけが平均以上であるP型、M型、さらに両方とも平均に満たないpm型とが比較され、リーダーシップの機能は、集団を維持しながら課題解決し目標達成を目指すことが確かめられた。

このPM理論は、表出的リーダー (=M) と道具的 (手段的) リーダー (=P) と言い直すことも可能だろう⁽³⁴⁾。これを用いると〈共働の宗教指導者〉の二元的リーダーシップは「分化と協業の一般的パターンの一つとしてとらえる」ことができるだろう⁽³⁵⁾。集団成員間の統合の役割を果たすのが前者であり、宗教指導者の配偶者たちはその役割を持つことが期待されている。もちろん牧師や住職は集団の目的達成のリーダーとして宗教的指導者としての役割が期待されており、これは、道具的リーダーもしくはP型と見なせるということになる。

リーダーシップ理論はその後、リーダーとフォロワーの関係および状況の対応が問われ、また、多元的状況の影響を踏まえたアプローチや、リーダーとフォロワーの社会認知を重視した考察も進められ、その他多様な分野を対象にした研究がなされている⁽³⁶⁾。さらに、女性リーダーやリーダーシップの性別役割に関する研究がすでに幾つも提出されている⁽³⁷⁾。本稿ではその指摘にとどまるが、今後、これらの議論のうち宗教集団におけるリーダーシップを考察する上で必要な理論を、今一度検討して導入していきたい。そして、上記のPM型の説明とは異なるリーダーシップ理論による説明を検討したいと考えている。

むすび

前節まですでに本稿の主張は終えた。今後の研究課題を述べておこう。まず、すでに述べているが、〈共働の宗教指導者〉という新たな語彙を提唱するからには、本稿で扱ったキリスト教と仏教のみならず、新宗教や神道など、他の宗教における共働関係のパターンを検討する必要があるのは当然である。また、キリスト教でも仏教でも今後さらに丁寧な調査を続け、検討を重ねたい。さらに、繰り返しになるが、本稿ではリーダーシップ理論でも、従来より用いられたごく基本的な部分で説明をしたに過ぎないので、他の様々な研究を踏まえて宗教教団における導入を検討したい。課題ばかりが挙がるが、ぜひ今後も〈共働の宗教指導者〉という研究視角で対象を見直し、諸問題を包括するような研究を示したい。

【註】

- (1) 本稿は日本宗教学会第 64 回学術大会（2005 年 9 月 10 日）での口頭報告「宗教指導者の配偶者」の発表原稿を基礎とし、当日の質疑応答を踏まえ、論点を整理し直して大幅に加筆修正したものである。口頭報告の要旨自体は『宗教研究』347、2006 年に掲載予定なので併せて参照されたい。なお、筆者の受容・定着に関する研究の一例として、キリスト教に関しては、拙稿「キリスト教受容の現代的課題」『宗教研究』326、2000 年、25-47 頁を、仏教に関しては同「都市・郊外化地域の寺檀関係に関する予備的考察」『宗教学論集』24、2005 年、125-137 頁を参照されたい。
- (2) 対馬路人「教祖の共働者と共働の教祖」井上他編『新宗教事典』弘文堂、1990 年、111-113 頁。
- (3) ヘレン・ハーディカは、巫女—審神者という独特のジェンダー構造をはらむ古代シャマニズムからの変遷を探った研究を提出した（ヘレン・ハーディカ「新宗教の女性教祖とジェンダー」脇田晴子・S.B. ハンレー編『ジェンダーの日本史(上)』東京大学出版会、1994 年、119-152 頁）。巫女に関する 1990 年代以降の重要な研究業績として、川村邦光『巫女の民俗学』1991 年、青弓社、池上良正『民間巫者信仰の研究』未来社、1999 年、平山眞『巫女の人類学』日本図書センター、2005 年などが挙げられる。
- (4) 拙著『ライフヒストリー研究の基礎』創風社、2002 年、同「牧師にならなかった〈牧師夫人〉」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房、2003 年、141-157 頁、同「キリスト教会を継ぐ者の語り」川又俊則・寺田喜朗・武井順介編『ライフヒストリーの宗教社会学』ハーベスト社、2006 年、所収などを参照のこと。
- (5) それらについては、ジョン・ワインガーズ『女性はずいぶん司祭になれないのか』（伊従直子訳）明石書店、2005 年、女性と仏教東海・関東ネットワーク編『仏教とジェンダー』朱鷺書房、1999 年、および同編『ジェンダーイコールな仏教をめざして』朱鷺書房、2004 年などを参照のこと。
- (6) 日本の学会動向を略述しておく。1989 年の日本宗教学会の学会誌『宗教研究』で特集が生まれ、1990 年度の日本仏教学会において「仏教と性」が共通課題に取り上げられた。その後も、1995 年 3 月に国際宗教研究所主催で「女性と教団」という公開シンポジウムが開催された。さらに、1997 年には「宗教と社会」学会のワークショップ「宗教とジェンダー」や、1999 年には日本宗教学会の第 10 部会での「宗教と女性」という部会が開催された。個別の単行本・論文以外にも、研究グループによる報告書（『宗教とジェンダー—その性支配と文化的構造の研究』平成 13-15 年度科学研究費補助金基盤研究 C1 研究成果報告書（研究代表者伊藤公雄））も刊行され、着実に成果が著されている。

- (7) 掛川典子「フェミニスト神学と仏教研究」『女性文化研究所紀要』(昭和女子大学)17、1996年、15-31頁。
- (8) 川橋範子・黒木雅子『混在するめぐみ』人文書院、2004年。
- (9) 彼女たちの代表作の一部、メアリ・デイリ『教会と第二の性』岩田澄江訳、未来社、1981年、ローズマリー・R・リューサー『性差別と神の語りかけ』小檜山ルイ訳、新教出版社、1996年、エリザベス・S・フィオレンツァ『彼女を記念して』山口里子訳、日本基督教団出版局、1990年、E・モルトマン=ヴェンデル『イエスをめぐる女性たち』大島かおり訳、新教出版社、1982年、などはあまりにも有名。
- (10) 山口里子「フェミニストの視点から聖書を読む」『現代思想』26(5)、1998年、215-227頁。
- (11) 森田美芽 1994「フェミニスト神学の現状と課題」『神学と人文』(大阪キリスト教短期大学紀要)34、1994年、109-120頁、小原克博「神のジェンダーに関する一考察」『宗教と社会』4、1998年、3-23頁他。また対談形式だが広く問題提起をしたものとして、野村文子・川橋範子「現代宗教と女性」『現代宗教 2001』東京堂出版、2001年、123-142頁がある。
- (12) ハーディカ、前掲論文、119頁。
- (13) 筆者は自らのウェブサイトはこのテーマに関連する文献目録を提示・更新している。参照されたい(<http://toshi-k.net/booklist/>)。
- (14) 猪瀬優理「宗教集団における『ジェンダー』の再生産」『現代社会学研究』13、2000年、61-79頁。
- (15) 日比野が扱ったのは、「フェミログの会」「フェミニズム・宗教・平和の会」「女性と仏教」の3グループである(日比野由利「宗教研究におけるフェミニスト・アプローチの多様性と可能性」『現代社会学理論研究』10、2000年、383-394頁)。日比野はそれらの特徴を「仏教の差別構造批判」「宗教にコミットしながら、宗教批判をすること」「仏教伝統の再創造」とまとめた。
- (16) 「寺族」という語彙とその立場・役割に関する疑義は、多くの論者が指摘している。例えば、中野優信「曹洞宗における『寺族』・男性僧侶の意識とその乖離」『曹洞宗研究員研究紀要』25、1994年、107-115頁、佐藤智香「寺族と共にすすめる個人布教」『真言宗豊山派総合研究院紀要』7、2002年、109-115頁、国守妙啓「これからの寺族の在り方」『教化研修』48、2004年、205-208頁、瀬野美佐「寺族問題の基礎認識」『教化研修』49、2005年、183-187頁など。

出家主義にもとづく僧侶に配偶者や子がいる現実も問題だが、本稿では現状分析を試み

- るため、川橋範子の言う「虚偽の出家主義」の問題は触れない(川橋・黒木、前掲書、73頁)。僧侶の配偶者を考察するならば、この問題は無視できないだろう。
- (17) 大谷賢二・松枝『がんばれ牧師夫人』教会新報社、1979年、25頁。
- (18) 牧師館と教会の区別がなく、玄関も一緒だったある教会の実態を回顧して、ある牧師が次のような苦勞談を述べている。「日曜日は全館開放状態」で、幼児と乳飲み子を抱えた〈牧師夫人〉は、「子どもに乳飲ませていた部屋に急に人が入ってくる」経験をした。さらに、その子どもが幼稚園に通う頃には、「日曜日にも自分の城を明け渡さなければならぬ生活に耐えられ」ず、「泣きじゃくって止まらない」などの影響も出た結果、牧師館と礼拝堂を仕切り、集会室を建て増すことを提案、賛否両論の末、役員会・総会で承認を得て実施した。その後10数年を経て、「子どもたちは洗礼を受け、教会を愛して奉仕してくれ」という(匿名「牧師家庭の一事例」『牧会ジャーナル』27、2005年、6-7頁)。
- (19) キリスト新聞社編『キリスト教年鑑2005』キリスト新聞社、2005年、94頁に掲載されている統計資料により算出。
- (20) 森岡清美「僧侶妻帯と寺院の世襲」森岡編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、1986年、69-111頁。内野久美子「近代仏教における女性宗教者」『宗教研究』253、1982年、21-41頁、熊本英人「寺と家族・寺の家族」『日本仏教学会年報』69、2004年、177-187頁など。
- (21) 石上和敬「伝統仏教寺院の住職配偶者に関する一考察」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』20、2004年、23-38頁。
- (22) 10歳以上の寺族が寺族得度を受けられ、18歳以上になると寺族通信教育課程を1年間受講でき、終了後申請によって准教師資格が得られる。さらに住職の申請によって、所属寺院の寺族代表となれる。
- (23) 寺院における跡継ぎ問題については、女性と仏教・東海・関東ネットワーク、前掲書、2004年などに多数の報告が掲載されている。なお、〈住職夫人〉への実質的要求について川橋は「住職の補佐、子弟の教育」の2つのみだと指摘している(川橋・黒木、前掲書、166頁)。
- (24) 「各宗派の寺族婦人規定は怎么样了」『月刊住職』5月号、1998年、12-27頁。
- (25) 黒木雅子は、天台宗女性僧侶の経験を追った論考を発表した(黒木雅子「女性のスピリチュアル・クエスト」『宗教と社会』11、2005年、25-41頁)。その中で天台宗では2002年現在、全僧侶7379名中女性僧侶が1555人、そのうち女性住職は103人だと述べている。
- (26) 11年半開拓伝道して様々な葛藤に苦しんだ〈牧師夫人〉が、他の教会から招聘をうけた牧師とともに転じたところ「以前あんなに義務的であった祈祷会が、私には楽しくて待

- ち遠しくて仕方がないように思われてきました」というように大きく変化した事例もある（工藤信夫『牧会者としての心の援助』いのちのことば社、1993年、147頁）。もちろん、場所が変わればすべて解決するというわけではない。役割葛藤は対人関係だけではなく、自らの問題でもある。
- (27) 住職の死の結果、年齢などの問題で子どもが世襲できずに寺院を離れる場合もある（山本道枝「山寺生活三十年」女性と仏教東海・関東ネットワーク編、前掲書、2004年、178-180頁他）。
- (28) 過疎について宗派によってはすでに大きく問題化したところもある（『ここまで来ている過疎寺院』日蓮宗宗務院、1989年他）。また、人口移動による無住寺院や兼務寺院の増加など看過できない問題が現出している（平子泰弘「曹洞宗における兼務寺院数の推移について」『宗教学論集』24、2005年、49-74頁他）。これは、曹洞宗で10年ごとに実施している報告書の単純集計を記述した部分でも記述されている（洞外文隆編『一九九五（平成七）年曹洞宗宗勢総合調査報告書』曹洞宗宗務庁、1998年）。
- (29) 女性と仏教東海・関東ネットワーク編、前掲書、2004年他。
- (30) 洞外文隆編、前掲書。他に、白尾敦子他「座談会 寺に暮らす女性の視点から」『教化研究』118、1998年、43-65頁他。
- (31) 山内祥信『住職の補佐』という役割からくる拘束感『教化研修』47、2003年、91-100頁。山内が検討した資料として、『曹洞宗宗勢総合調査』や禅文化研究所現代問題研究会『寺院現況調査報告書』がある。
- (32) 脚註17で紹介した記述について、多少言葉を換えて〈住職夫人〉に対する檀信徒の声だとしても違和感ないと思われる。
- (33) 三隅二不二『リーダーシップ行動の科学（改訂版）』有斐閣、1984年他。
- (34) パーソンズとベルーズの家族に関する研究で提出された概念である（T・パーソンズ、R・F・ベルーズ『家族』橋爪貞雄他訳、黎明書房、2001年）。彼らによれば、家族は、仕事をする家族を社会へつなぐ「道具的役割」（instrumental role）と、家族の成員を結びつけ安心感の源泉として統合する「表出的役割」（expressive role）の2つを夫婦が共有する構造を持つという。そして、生物学的差異にもとづく男女の役割が説明されている。
- (35) 対馬、前掲論文、112頁。
- (36) リーダーシップ理論の研究史として、本稿では、淵上克義『リーダーシップの社会心理学』ナカニシヤ出版、2002年、上田泰『組織行動研究の展開』白桃書房、2003年他を参照した。
- (37) リーダーシップ理論において、「女性のリーダーシップ」「性差とリーダーシップ」な

どの研究は 1980 年代以降に展開したという (M・M・チェマーズ『リーダーシップの統合理論』白樫三四郎他訳、北大路書房、1999 年他)。そして既に宗教以外の分野では、参照すべき性別役割の事例研究がある (坂田桐子『リーダーシップ過程における性差発現機序に関する研究』北大路書房、1998 年、山田礼子『「伝統的ジェンダー観」の神話を超えて』東信堂、2004 年)。本稿ではそれらの知見を考察に十分反映できていない。今後の課題としたい。